

に苦しんでいる。あなたは罪の意識に苦しんだ。だが事実を公にするわけにもいかない。そんなことをすれば今度は英国の立場が国際的に危ぶまれ、最悪の場合、英国とソ連を巻き込んだ戦争、ひいては第三次世界大戦へと発展する危険さえあるからだ。だからこそ、あなたはせめてもの罪滅ぼしとして、1年前からこの村に寄付をしている。あなたはこの村が好きだ。ようやく手に入れた平凡でどかな生活がいつまでも続けばいいと思っていた。少なくとも昨日までは。

事件前後の動向

2週間前 教会にはもともと「牧師」がいた。しかしこのころ急に「突然ですが引っ越すことになりました」という書置きを残して姿を消した。警官いわく牧師自身の筆跡に見えたらしく、事件沙汰にはなっていない。

昨日 警官から、今夜の聞き込みの件が6人に通達された。事件の起こらないこの村では異常事態だ。この村で最近あった大きな事件・事故といえば、去年のソ連領での原発事故で放射線が、村のすぐ近く（立入禁止区域）まで迫ったことだろう。あのときは村人たちもひやっとした。もしも警官がこの件について調べているのなら、事故とMI6とのつながりを掴んだらどうか？ 田舎の一警官に気づけるとは思えないが——とはいえ、念のためだ。彼が握った情報を知っておきたい。

当日

21:00 警官は正義感が強く、誠実な男だ。時間にはいつも正確。今日もこの時間に宣言どおり家を出ただろう。あなたは今のうちに警官宅を家探したいと考えた。彼の捜査資料を確認したかったからだ。しかし腕の古傷が痛んだため、しばし安静にした。焦らずとも、警官が帰宅するまで余裕は充分にある。

21:25 痛みが治まってきた。あなたは自宅を出て警官宅を目指す。

21:30 **郵便屋**宅のそばを通過。

21:35 警官宅に到着。このとき警官宅から東へと立ち去る何者かの気配を感じ、あなたはとっさに息をひそめた。警官ではなさそうだ。何者だ？ 気にはなるが接触は避けた方が無難だろう。気配が去った後、あなたは玄関のドアとドアの隙間に、自宅から持参していたナイフを挿し込んで開けた。

21:40 警官宅を調査。村の駐在レベルの家宅捜査程度はあなたにはお手のものだ。資料は、書斎の引き出しから簡単に見つかった。

捜査資料は山ほどあったが、MI6に関わっていそうなものだけを確認した。

「村にはMI6の諜報員が潜んでいる可能性がある」「諜報員のコードネームは数字で『10(テン)』。両手に持った刃物を器用に使うため『テーブルマナー』とも呼ばれる」という内容だ。

驚いた。と同時に、妙だ、とすぐに気づいた。村の駐在がたやすく知れる情報ではない。そう思って情報の出所をよく見ると、これらの仕入れ先は、海外からの匿名電話だとわかった。

——なるほど、敵国の組織が流したか。

英国を陥れたい他国の組織がMI6の真実に気づいた、もしくは、確証はなくとも疑念を抱き、警官に調べさせるために情報を流した——そう考えるのが自然だ。警官は正義感が強いために、知らず知らずのうちに敵国に利用されたにすぎない。

彼には直接、その旨を話した方がいいだろう。きっと納得してくれる。万が一、従ってくれない場合には奥の手もある——あなたは部屋の調査中に、警官のものであろう拳銃も見つけていた。「隕石をモチーフにした置物」があり、それを上下2つにパカッと開けると、中に隠されていた。右手に難のある今のあなたはナイフを使っても全盛期の動きはできない。拳銃の方が無難だ。

この銃口を向けて説得すれば、大人しく言うことを聞くはずだ。発砲音を抑えるために近場のクッションも一緒に持った。

……ひとつ疑問なのは、わが国の警官は「非武装」が原則のはずなのに、なぜ銃器を持っているかだ。まあ、その点も直接問いただせばわかるだろう。

それから警官宅にて息をひそめ、彼の帰りを待つことにした。

21:45 警官が帰ってきた。あなたは玄関入ってすぐの位置で出迎え、話をする。

警官はとても驚いていた。あなたは自分が元MI6であることと、今は引退したが、警官がMI6について調べていることを知って侵入させてもらったことを伝えた。まず、なぜ予定より帰宅が早いのか？（紳士宅はあなたが不在だから飛ばしたとしても、警官の帰宅は22:00になるはずだ）を尋ねると、彼は回答を拒んだ。

「残念です」と警官は言った。「あなたのことは信じていたのに。MI6はソ連の原発の危険性を知っていながら黙した。そんな人に、私の事情を話すわけにはいきません」対するあなたは、「きみが手に入れた情報は敵国による工作であり、英国内の世論を操作するためのものだ」と、優しく論じた。

が、厄介なことに彼は折れなかった。「ご心配ありがとうございます。この村にはあなたの他に、外国の組織の構成員が入り込んでいることには気づいています。ですが、MI6が原発事故の重大な脆弱性に気づきながら見て見ぬふりをしていた、という点も事実のほうです。これは警察内部の資料とも照らし合わせ、確証を得ています」

「だが、かといってこの件を捜査はしない方がいい。きみ自身の命にかかわる」とあなたは言う。警官は「本官は社会正義をまっとうします。この事実は公表すべきです」と返す。あなたはため息をつき、本意ではなかったが、拳銃を彼に向けた。

彼は一瞬驚いたが、毅然としていた。「拳銃、見つかってしまったのですね」「なぜ、『非

武装』の規則を破った?」「あくまで自衛のためです。積極的に使う気はありませんでした」「その論理は、核と同じだね」「一個人が持つ武力と、国民を巻き込む政府が持つ武力とでは意味が違います。それに今は、保有の是非ではなく、危険性を知っていながら公表しなかった不誠実さを語るべきです」「たしかに我が国は不誠実ではある。だが世界はきみが考えるよりも広く、複雑な思惑で動いている」「政府が自国民を放射能にさらす選択をし、そのことを隠すのが正しい思惑ですか? 少なくとも、国民には知る権利がある」「タイミングを考えてほしい。今回の一件が明るみに出れば、ソ連を刺激する十分な材料となる。ぎりぎりのところで保っている冷戦の、緊張の糸が切れるかもしれない。世界を巻き込む最悪のシナリオとなったとき、その責任をきみが取れるのか?」「おっしゃるとおり、世界は戦争を選ぶこともできます。ですが避けることだって当然できます。人が選ぶものなのだから。私は、人間の善意を信じています。銃を撃つ気がないのなら返してください。本官には、まだやらなければならないことがある」

警官は臆さず、あなたに一步詰め寄った。

このときタイミング悪く、玄関そばに置かれていた電話が鳴った。先に警官に取られてしまった。あなたはとっさに本体のフックスイッチ(受話器を置くことで押し下げられ通話を切るスイッチ)を指で押し、通話を切る。警官は不服そうに受話器を元の位置に戻した。

21:50 警官は近づいてくる。あなたは逡巡する。が、事実の公表だけは許すわけにいかなかった。警官の主張も一理はあるが、世界大戦の危険性はやはり増すからだ。大戦は、起こってからは取り返しがつかない。

あなたはついに、苦渋の選択をした。つまり彼へ発砲した。クッションを銃口にあてがったので、発砲音はほぼなかった。

警官は呻き、玄関のドアに背中を預けるようにして扉を開き、うつ伏せに地面に倒れた。出血は多い。そのとき、誰かの足音が東から聞こえてきた。

あなたは足音を極力消しながら、自宅方面へと去った。警官はもうまともな情報を話そうにないし、治療も間に合わないとわかったからだ。

ある程度離れてから、警官宅の方から男の大声が聞こえた気がしたが、すでに郵便屋宅前のポストあたりまで来ていたので、拳銃の処理を優先した。

21:55 郵便屋宅の近くにあるポストに拳銃を突っ込んだ。

22:00 帰宅。自責の念にかられた。国を、世界を守るためとはいえ、ひとりの人間を殺した。必要なことだと今でも思う。だが、これでは現役時代から何も変わっていないのではないか? 全体を優先するために原発の重大な脆弱性を指摘しなかったMI6と同じではないか? あなたは苦しんだ。

22:25 家の電話が鳴る。出ると、村長から村全体への連絡網だった。「警官の遺体が見つかった。すぐに来てほしい」とのこと。第一発見者は村長になったのだろうか? ともあれ断るのは不自然なので現場へ向かった。

その後、現場につくと謎のダイニングメッセージがあり、困惑した。